

石壁寺曇鸞大師の淨土觀成立の意義と その特徴について

藤 堂 恭 俊

はじめに

鳩摩羅什及びその門弟の淨土觀との關聯

淨土の對衆生的作用を強調する淨土觀

むすび

本稿の第一篇は北魏前期の佛教に對して、指導的役割をはたした鳩摩羅什や僧肇などの般若思想に根ざした淨土觀を主として『注維摩經』佛國品に求めつつ、その影響をうけた曇鸞の淨土觀において、傳承と創意のあとを見出し、その意義を闡明にせんとするものである。

第二篇は、前篇において意義付けられた曇鸞の淨土觀の特徴を、特に對衆生的作用に見出し、この點をあきらかにせんとするものである。

1 鳩摩羅什及びその門弟の淨土觀との關聯

曇鸞は『無量壽經論註』の開卷劈頭に、龍樹の『十住毘婆沙論』易行品に説く難易説を引用して

難行道者謂於五濁之世於無佛之時求阿毘跋致爲難（中略）易行道者謂但以信佛因緣願生淨土乘佛願力得往生彼

清淨土 佛力住持即入大乘正定聚 正定即是阿毘跋致

と言ひ、龍樹の説く行體としての難易説をふまえながら、さらにこれを一步進めて彼獨自の視野から行緣の立場にたつて難易二道を規定したのである。⁽²⁾これによると曇鸞は、みずから阿毘跋致を體得すべき實踐の行われる場としてのこの地上の現實世界を五濁の世、無佛の時と感じとつているのであるが、この現實感はその淨土觀と無關係であり得ないであらう。

このなか、特に彼の無佛感については既に論じたように、造像銘記などによると北魏正光五（524）年から東魏武定七（549）年にいたる二十五年間に、北シナ一帯の地域で形成された、この地上出現の佛陀である釋迦・彌勒に對する隔絶感——現在無佛という實感と表裏するもので、現在ただ今、阿毘跋致の體得をめざして佛道を修せんとする行者を、教えみちびく佛陀の不在を表明したものである。阿毘跋致の體得は、この求道者曇鸞みずから感じてつた無佛という危機感の突破にかかわっているだけに、その突破を

釋迦前有六佛 釋迦繼六佛而成道 處今賢劫 文言將來有彌勒佛 方繼釋迦而降世

と『魏書』釋老志が指摘する釋迦・彌勒というような、この地上出現の佛陀、——過去、現在、未來と繼承するような世代的系列につらなる佛陀の上になしうることは到底不可能なわけであるから、これとは系列を異にする「佛

力住持して即ち大乘正定の聚に入」らしめる強烈なたらきをもつ、「現在西方」⁽⁴⁾の阿彌陀佛の清淨の土に見出したことは、けだし當然のことと言わなければならない。

この阿彌陀佛の淨土は、五濁・無佛の土（此岸）に對して清淨・有佛の土（彼岸）⁽⁵⁾であるからには他方淨土と言ふべきである。曇鸞はこの他方淨土のことについて、『無量壽經論註』卷下において阿彌陀佛の第二十願を掲載した直後に

言十地階次者 是釋迦如來於閻浮提一應化道耳 他方淨土何必如此 五種不思議中佛法最不可思議 若言菩薩必從一地至一地無超越之理未敢詳也

といつてゐるのによると、あきらかに阿彌陀佛の淨土をもつて他方淨土となしたことが知られるであらう。さらに仔細にみるならば、積極的な表示ではないが、

我土菩薩皆慈悲勇猛堅固志願 能捨清淨土至他方無佛法僧處 住持莊嚴佛法僧示如有佛使佛種處々不斷

——無三寶處住持三寶章の釋——

と『無量壽經論註』卷上⁽⁷⁾にいつてゐることから類推するならば、彼はたしかに阿彌陀佛の淨土を他方淨土であると考へていたであらうことは間違いないであらう。

鳩摩羅什の譯出諸經論にみちびかれた南北朝初期の佛教は、般若系諸經典の重譯と龍樹の論書の漢字譯を得て、般若系思想をその主流となすにいたつたことは史實にあきらかなところである。そうした思想傾向のなかにあつて、鳩摩羅什及びその指導をうけた門弟たちによつて淨土はいかに理解されていたであらうか。特に曇鸞を育てた

北魏佛教前期（洛陽遷都以前）の趨勢は、魏收が『魏書』釋老志のなかで指摘しているように、鳩摩羅什の譯出諸經論がさかんに使用され、しかもその門弟四哲の一人として著名な僧肇の諸勞作が、權威のある著述として「學者宗之」というように、指導的役割をはたしていたことに注目するならば、その系統における淨土觀とのかかわりにおいて曇鸞の淨土觀の特徴をあきらかにする必要があるわけである。

先ず最初に鳩摩羅什その人の見解を一考するに、彼は『維摩詰所說經』卷第一佛國品を解釋するなかで

言譬如寶莊嚴佛國始是釋迦眞報應淨國 淨國卽在此世界 如法華經壽量品中說 淨穢同處而不相雜 猶如一器

中有二種食應二種衆生

といつて⁽⁹⁾いる。この見解によるかぎり鳩摩羅什は、この地上以外に淨土の建立を考えていないのである。この解釋は「爾時螺髻梵王語舍利弗 勿作是念謂此佛土以爲不淨 所以者何 我見釋迦牟尼佛土清淨 譬如自在天宮」とい⁽¹⁰⁾う『維摩詰所說經』の文に對するものであり、舍利弗がみる土も梵王がみる土も、兩者は同一處をみているわけであるが、質を異にする二つの見方となつたのである。

このように一處に異質二見が成立しようということは、舍利弗のみる穢土は梵王にはなく、梵王のみる淨土は舍利弗にはないからである。つまり一處であつても穢土と淨土とはたがいに障礙することとはならないわけである。かく鳩摩羅什は、釋迦牟尼佛の淨土であればこそ當然ではあるが、この地上に淨土の建立を認めている。しかるに曇鸞はこの地上を五濁の世、無佛の時とし、阿彌陀佛の清淨土を他方淨土とし、兩者を對立せしめ峻別しているのである。したがつて一處に異質の二土を許す見解と、⁽¹¹⁾異處に異質の土を認める見解とは、おのずから區別すべきである。ともあれ、一處異質二見の見解が指導的役割をはたしていた北魏佛教に育てられた曇鸞が、そうした淨土觀

をうち破つて他方淨土に注目し、その信仰に生涯を賭したことは、まさに劃期的なことと言わなければならないであらう。

このように曇鸞によつてなされた劃期的な淨土觀の移行は、はたして彼を育てた前時代の淨土觀を抹殺したことを意味するのだろうか。あるいは曇鸞は一處異質二見のなから、なにかを學びとることによつて淨土觀の移行を成立せしめたのであらうか。いずれにしても興味ある、注目すべき問題である。

曇鸞が彼此二岸という異處において、淨穢という異質の土を見出し、兩者をするべく峻別・對立せしめたことは、一處異質二見を表示しようとする意圖と、なんら矛盾するものでないように思われる。ということとは、一處異質二見はもともと、淨土と穢土とを地續きにつながっているように考えようとする見解をうち破ろうとするものであり、淨土は穢土と同一平面上の遙か彼方に在るのではなく、むしろ穢土とは異質の土であることを示めそうとするところに意圖があるとするならば、同一處において舍利弗がみる穢土と梵王のみる淨土とは峻別さるべきであり、しかも「淨穢同處而不相雜」と指摘されていることは、淨穢兩者の間に質的に斷絶のあることを示すものでもある。曇鸞は淨穢彼此二岸を峻別し、その質の異なりを經典の表現をかりて「十萬億刹」⁽¹²⁾と表示することによつて、淨穢二土の間にこえがたい斷絶のあることをあらわしたのである。このように考えると、一處においてみられた淨穢二土を彼此二岸という異處において、さらに「不相雜」という質的斷絶感を「十萬億刹」という距離的斷絶感をもつて示したところに特異性があるわけである。そうした點で、あくまで一處異質二見が示めそうとした意圖から逸脱するものではない、と見ることができるであらう。

僧肇は『注維摩經』卷第一佛國品のなかで鳩摩羅什の解釋に續いて

肇曰 夫同聲相和同見相順 梵王卽法身大士也 依佛慧故所見皆淨 因其所見而證焉 且佛土眞淨超絶三界 豈直若天宮世淨而已哉

⁽¹³⁾とみずからの見解を表示している。これによると僧肇は、釋迦牟尼佛の土の清淨をみる梵王を法身の大士と規定することによつて、同一處を穢土とみる舍利弗と峻別している。この同處異質二見の相違について僧肇は

夫以群生萬端業行不同殊化異被致令報應不一 是以淨者應之以寶玉 穢者應之以砂礫

⁽¹⁴⁾といつてゐるように、各人の行業とそれにもとづく果報の相違に起因することを指摘している。しかば、土の清淨なるをみとつた梵王の行業が清淨であることは、「依佛慧故所見皆淨」という文によつて知られるように、佛慧に依據したからであり、また舍利弗が同一處を「穢惡充滿」⁽¹⁵⁾とみとつたことは、「心有高下故丘陵陵是生」という文によつて知られるように、心に高下の分別執著があるからであり、「佛土豈不淨 罪穢故不覩」⁽¹⁶⁾と言われる所以でもある。かく佛慧に依據するか否かが、見不見を峻別する基點となるわけであるが、いうところの佛慧に依據するとは、「深入佛慧淨業既同則所見不異也」⁽¹⁷⁾という僧肇の見解によると、佛とその業を同じくすることであり、佛と業を同じくすればこそ土の清淨をみることができると、そこに共報ということが考えられていたとすべきである。

さらに僧肇は佛の眞土について

謂土之淨穢繫于衆生者 則是衆生報應之土 非如來土 此蓋未喻報應之殊方耳 嘗試論之 夫如來所修淨土以無方爲體 故令雜行衆生同視異見 異見故淨穢所以生 無方故眞土所以形 若夫取其淨穢衆生之報也 本其無

方佛之眞也 豈曰殊域異處凡聖二土然後辨其淨穢哉

といつてゐる。⁽¹⁸⁾これによると僧肇は土に淨穢異見の成立する所以を指摘して、衆生の業行の報應に起因せしめながらも、佛の土は報應の土でないことを明示している。佛の土が衆生の業行に報應する土でないといつてゐるのは、「美惡自彼 於我無定 無定之土 乃曰眞土」⁽¹⁹⁾とあるように、美惡、淨穢の差別をこえた眞土であるからであり、無方無定であるからよく淨穢の異見を成立せしめ得るわけである。従つて佛の眞土は、異處に凡夫の土に對立した聖土として在るのではないのである。

今これら淨土觀をめぐる僧肇の見解のなから、衆生の行業とその報應および共報、さらに淨穢をこえた佛の眞土という三つの問題を取りあげ、それらが曇鸞の淨土觀をめぐる諸問題の上に、いかに展開しているかということに注目してみたい。

曇鸞は『無量壽經論註』卷上において、阿彌陀佛の國土の莊嚴建立を説明するにあたつて、一々現實の世界の關點を指摘し、かかる關點のあるが故に佛は大誓願をおこして淨土をかまえ、それらの關點をなからしめ給うのであるといつてゐる。このなか現實の世界の關點について

佛本何故起此莊嚴 見有國土以愛欲故則有欲界 以攀厭禪定故則有色無色界 此三界皆是有漏邪道所生 長寢大夢莫知怖出 是故興大悲心願我成佛以無上正見道起清淨土出于三界
⁽²⁰⁾
と言ひ、また

佛本何故起此莊嚴 見有國土優劣不同 以不同故高下以形 高下既形是非以起 是非既起長淪三有 是故興大悲心起平等願 願我國土光炎熾盛第一無比

——國土莊嚴第六妙色功德偈の釋

と⁽²¹⁾いうように、衆生が三有にあつて、しかもそこから出離することすら知らないのは、衆生自身の行業とその報應に起因することを指摘している。かの舍利弗が梵王が土の清淨をみとつた同處に清淨をみず、穢惡充滿とみとつたことについて、「佛土豈不淨 罪穢故不親」と⁽²²⁾なした僧肇の見解と揆を同じくするように、曇鸞もまた「光有所不照 豈非有礙耶 答曰 礙屬衆生非光礙也」という考えをもっている。しかしながら、曇鸞はみずからの業報によつて三界という現實の世界にしばらくられている衆生に對して、淨土をかまえることによつて、衆生をして三界から離れしめる力用をもつ淨土を強調したことは、淨土觀に劃期的役割をはたすこととなるわけである。

なおこの衆生の業行とその報應に關聯して忘れてはならないことは、『無量壽經論註』卷上の終りの方にある三義を校量するところで、衆生の業業がいかにとり扱われているかということである。即ち

汝謂五逆十惡繫業等爲重 以下下品人十念爲輕 應爲罪所牽先墮地獄繫在三界 今當以義校量輕重之義
 と言⁽²³⁾い、在心、在緣、在決定の三義をもつて、「校量三義 十念者重 重者先牽 能出三有」⁽²⁴⁾ことを指摘していることである。曇鸞は「重者先牽」という相手の論理を使用して、相手の言い分を思存分うち破つていのである。かかる衆生の繫業とそれからの出離についての曇鸞の指摘は、みずからの行業とその報應について

我從無始循三界 爲虛妄輪所回轉 一念一時所造業 足繫六道滯三塗

とい⁽²⁵⁾う自覺に根ざしていると言⁽²⁶⁾い得るであろう。この自覺は現實の世界を五濁の世、無佛の時と看破し得た曇鸞としては、むしろ當然な内省といわなければならない。

さらに曇鸞は『無量壽經論註』卷下において、器世間と衆生世間の三種清淨について、

夫衆生爲別報之體 國土爲共報之用 體用不一 所以應知 然諸法心成無餘境界 衆生及器復不得異不得一

不一則義分不異同清淨 器者用也 謂彼淨土是彼清淨衆生之所受用 故名爲器

といつてゐる。このなか、十七種の莊嚴功德成就の國土を共報の用となしてゐることは、國土を共業の所感とすることであり、自他ともに受用すべき果報であることを示すものである。これは僧肇が「淨業既同則所見不異也」といつてゐるのと同調である。曇鸞はこの器世間清淨を衆生間清淨とのかかわりにおいてとらえ、前者を用とし、後者を體と規定して兩者を「不得異不得一」の關係にあることを指摘してゐる。この曇鸞の見解は「清淨有二種 何等二種 一者器世間清淨 二者衆生世間清淨」という『無量壽經論』の長行⁽²⁷⁾についての解釋であるが、この二種清淨を體用の關係としてとらえたのは、

佛土者即衆生之影響耳 夫形脩則影長 形短則影促

といふ僧肇の見解によつてゐるように思われる。

さらに僧肇は、善惡・淨穢の差別をこえた無方無定の土をもつて佛の眞土となしてゐるが、それは穢惡に對する善淨なる土というような對立的な土でないことを示すものであり、善惡・淨穢という分別ではとらえ得ないことを指摘した點で

蓋無非之曰是也 自是無待復非是也 非是非非百非之所不喻 是故言清淨句⁽²⁸⁾
といふ曇鸞の見解と同調であるといわなければならない。

また法身の無形無色を主張することで、北地の僧肇の見解と區別される南地の道生は、佛の淨土に關説して

生法師釋淨土不毀云 夫佛之不在者良以衆生穢惡故也 以穢故不在無穢必在 無穢故寄七寶以明之者 明無土

砂之穢耳 雖有實土之淨比於無形亦何異穢質耶 以理論之乃是無土義 既寄土言無故云淨土 無土之淨豈非法

身所託

といつてゐる。⁽⁸⁰⁾これによると法身は土砂の穢にも、實土の淨にもよることのないことを表明して、佛無淨土の見解をたててに至つたことが知られる。このような道生の淨土觀は、

法者無非法義也 無非法義者即無相實也 身者此義之體 法身眞實丈六應假
と⁽⁸¹⁾か

若有人佛者便應從四大起而有也 夫從四大起而有者是生死之人也 佛不然矣 於應爲有佛常無也

といふ⁽⁸²⁾ように、非人格的な無色無形の法身の土であるから、曇鸞が願生してやまなかつた人格的な佛陀の化を現成する場としての淨土——「佛力往持して即ち大乘正定の聚に入」らしめるとか、「衆生を不虛僞の處、不輪轉の處、不無籍の處において、畢竟安樂大清淨の處を得せしめんと欲す」といふ⁽⁸³⁾ような、強烈なはたらきをもつ有佛の清淨土とは一線を劃さなければならぬ。

このような道生と曇鸞の淨土觀は、法身と報身——もちろん曇鸞は報身などという表現を用いていないけれども——の土に關する見解として特色づけねばならない。と同時に淨土觀だけにかぎらず、すべての點で僧肇や道生の見解が當時の南北兩朝の佛教界の主流をなしていたその中であつて、報身土を全面的に表面だてた曇鸞の淨土觀の歴史的意義の重要性を忘れてはならない。

かく曇鸞は、人格的佛陀の淨土を積極的に強く表面だてることによつて一時期を劃したわけであるが、それとも、僧肇のいう「無方故眞土」や、道生のいふような佛無淨土という見解を、まったく等閑視したわけではない。

いな等閑視し得ないのであるから、いきおいそれとの關係をいかに理解し、表明したであろうか、ということが問題視されるであらう。

曇鸞はこの問題に對して「此三種成就願心莊嚴應知略説入一法句」という『無量壽經論』の長行をとおして、「四十八願等清淨願心之所莊嚴」といわれる三種二十九句の莊嚴（＝廣）と一法句（＝略）とが、「廣略相入」を示現するものであることを指摘し

菩薩有二種法身 一者法性法身 二者方便法身 由法性法身生方便法身 由方便法身出法性法身 此二法身異不可分一而不同 是故廣略相入統以法名と説明を加えている。

このように曇鸞は鳩摩羅什及びその門弟、とりわけ僧肇の見解が指導的役割をもつ北魏前期の佛教のなかで育ちながらも、その制約にしばられることなく、阿彌陀佛の淨土のもつ報身的特色を、あらわしだすことに成功をおさめたということができよう。ともかく曇鸞をして、法身的なものから報身的なものへ移行せしめたものは、なんといつても現在佛不在感であり、繫業感でもある。しからば報身的なものは、曇鸞の危機感突破の上にいかなる役割をはたし得たであろうか。このことについて次にかける問答は、解答を與えてくれるであろう。即ち

每有世俗君子來阿法師曰 十方佛國皆爲淨土 法師何乃獨意注西 豈非偏見生也 法師對曰 吾既凡夫智慧淺短末入地位念力須均 如似置艸引牛恆須繫心槽檻 豈得縱放全無所歸

といふのがそれである。このことは指方立相とまでは言い得ないまでも、その素地をつくるものとして、道綽・善導の教學に與える影響は大きいと言わなければならない。この問答のなか、「置艸引牛恆須繫心槽檻」といふのは、

かの『大智度論』に

譬如執事比丘高聲舉手唱言衆皆寂靜 是爲以聲遮聲非求聲也

といつてゐるのと同調異曲であり、執著をもつて執著をこえしめることは、淨土教の基本的性格でもある。また「彼淨土是阿彌陀如來清淨本願無生之生」とか、⁽³⁹⁾「彼土は無生界」とかいうように、淨土を無生界などという表現をわざわざ使用しなければならないのは、凡夫が往生しうる淨土に關する法身的立場からする説明句のようなものであるが、廣略相入の説明とともに大乘佛教の第一義諦とのかかわりを示すものであり、法身的なものが一般化してゐる佛教界において當然行わなければならないことであつたわけで、そのことによつて淨土の眞實性をうちだそうとしたものに過ぎない。

- 1 淨全 1. 219. a
- 2 拙著『無量壽經論註の研究』所收——「曇鸞教學の諸問題」3 易行思想とその展開 123—138 參照
- 3 『同右』所收——「北魏時代における淨土教の受容とその形成」4 釋迦・彌勒二聖に對する隔絶感の形成 28—36 參照。『シナ佛教における危機觀——特に隋唐時代以前における諸問題』——『佛教大學研究紀要』通卷第四十號參照
- 4 『讀阿彌陀佛偈』に「現在西方去此界 十萬億利安養土 佛世尊號阿彌陀」淨全 1. 209. a
- 5 『無量壽經論註』卷下に、「上三句（三種莊嚴功德成就の偈を指す）雖言偏至皆是有佛國土」——淨全 1. 250. a
- 6 不虛作住持功德偈の釋——淨全 1. 248. b
- 7 菩薩莊嚴功德偈の釋——淨全 1. 234. b

この外、卷上の讚嘆門釋に、「一若言一佛主領三千大千世界是聲聞論中說 若言諸佛偏領十方無量無邊世界是大乘論中說」

—淨全 1. 221. a

- 8 塚本善隆博士著『魏書釋老志の研究』176—178。拙著『無量壽經論註の研究』所收「北魏における佛教の展開と曇鸞の教學」67—83参照

- 9 『注維摩經』卷第一——大正藏 38. 337. c

- 10 鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』卷上 大正藏 14. 538. c

- 11 『大智度論疏』の著者である慧影は師の北周道安の説を祖述して

師言 如身子見穢土螺髻見淨國等 此是同處異質異見 此是報果所感 以業力故應我而彼虛 應我故所見不同 彼虛

空不相障礙——卷第十四——續藏經 74 套 202 右下

といつてゐるように、依然として繼承されてゐる。

この北周道安の説は、道綽の『安樂集』卷上に引用されている。即ち

淨土論云 一質不成故淨穢有虧盈 異質不成故搜原則冥一 無質不成故緣起則萬形——淨全 1. 677. b

というのがそれである。道綽はこの道安の文を引用して、さらに續いて

故知 若據法性淨土則不論清濁 若據報化大悲則非無淨穢——淨全 1. 677. b

と言ひ、法性土と阿彌陀佛の淨土との相違を表明してゐる。

- 12 『讚阿彌陀佛偈』—淨全 1. 209. a。

曇鸞がこのような距離感的表現を用ゐるのはこの箇所だけである。その他の場合は不實功德・眞實功德、三界・出三界、虛偽相輪轉相無窮相・畢竟安樂大清淨處といったように、淨穢二土を峻別し、對立的に説くことによつて、その異質性を具體的に示してゐることを忘れてはならない。

- 13 大正藏 38. 337. c

石壁寺曇鸞大師の淨土觀成立の意義とその特徴について

- 14 大正藏 38. 334. b
- 15 大正藏 38. 337. c
- 16 大正藏 38. 337. b
- 17 大正藏 38. 338. a
- 18 大正藏 38. 334. b
- 19 大正藏 38. 334. b
- 20 淨全 1. 223. b
- 21 淨全 1. 224. b
- 22 卷上 讚嘆門の釋 淨全 1. 221. a
- 23 卷上 善惡校量 淨全 1. 236. a
- 24 卷上 三義校量 淨全 1. 236. b
- 25 『讚阿彌陀佛偈』 淨全 1. 217. b
- 26 淨入願心 淨全 1. 251. a
- 27 淨入願心 淨全 1. 251. a
- 28 『注維摩經』 卷第一佛國品 — 大正藏 38. 334. c
- 29 卷下 淨入願心 — 淨全 1. 250. a
- 30 嘉祥『法華玄論』 卷第九 — 大正藏 34. 441. c
- 31 『注維摩經』 卷第二方便品 — 大正藏 38. 343. a
- 32 『同』 卷第九見阿閼佛品 — 大正藏 38. 410. b
- 33 卷上 國土莊嚴第一清淨功德成就偈釋 — 淨全 1. 222. b
- 34 卷下 淨入願心 — 淨全 1. 250. a

35 卷下 淨入願心 — 淨全 1. 250. b. なお「由生」「由出」の表現は『注維摩經』卷第七佛道品に

肇曰 智爲內照 權爲外用 萬行之所由生 諸佛之所因出 — 大正藏 38. 393. a

によつてゐるようである。ただし『淨名經集解關中疏』卷下には、「因出」を「由出」——大正藏85. 423. a—となし、「由生」「由出」の表現を用いている。

36 卷上の作願門釋において曇鸞は、「問曰 大乘經論中處處說衆生畢竟無生如虛空 云何天親菩薩言願生耶」——淨全 1. 221. b

とか、「問曰 依何義說往生」——淨全 1. 221. b — と自問し、これに對して自答しているが、これらは法身的なものからうける制約があつてこそ、自問自答したわけであり、法身的な立場になつての發言である。

37 道綽『安樂集』卷下 — 淨全 1. 695. a

38 卷第六 — 大正藏 25. 105. c

39 卷下 入第一義諦 淨全 1. 245. a

40 卷下 入第一義諦 淨全 1. 246. a

2 淨土の對衆生的作用を強調する淨土觀

曇鸞は『無量壽經論註』上下二卷のなかで、淨土の功德莊嚴について二様の理解をこころみている。今兩者を對照すれば左記のようである。⁽¹⁾

(上卷)

佛本所以起此莊嚴清淨功德者 見三界是虛偽相是

輪轉相は無窮相 如蚘蟻循環 如蠶繭自縛 哀哉

石壁寺曇鸞大師の淨土觀成立の意義とその特徴について

(下卷)

此云何不思議 有凡夫人煩惱成就亦得生彼淨土三

界繫業畢竟不牽 則是不斷煩惱得涅槃分 焉可思

衆生締此三界顛倒不淨 欲置衆生於不虛僞處於不

議

輪轉處於不無窮處 得畢竟安樂大清淨處 是故起

此清淨莊嚴功德也 成就者言此清淨不可破壞 不可

汙染 非如三界是汙染相 是破壞相也

この對照は「此清淨是總相」といわれる清淨功德莊嚴（國土莊嚴第一）の偈に對する釋を代表せしめることによつて、功德莊嚴に對する二様の理解を示し、それぞれの特徴を見比べようとしたものである。即ちこれによると上卷において示された理解から、淨土建立の意趣——現實の世界ならびに衆生の關點を一一指摘しながら、かかる關點があるが故に佛は大誓願をおこして淨土をかまえることによつて、それらの關點をなからしめようとする阿彌陀佛の聖意をよみとることができる。これに反して、下卷において示された理解から、淨土の功德莊嚴のもつ「不思議」という表現をもつて指摘されるところの、對衆生的はたらきをみとることができる。

このように曇鸞は淨土の功德莊嚴のもつ對衆生的はたらきを、「不思議」という表現をもつて指摘しているが、いうところの「不思議」について彼は

不可思議力者總指彼佛國土十七種莊嚴功德力不可得思議也 諸經統言有五種不可思議 一者衆生多少不可思議

二者業力不可思議 三者龍力不可思議 四者禪定力不可思議 五者佛法力不可思議 此中佛土不可思議有二種

力 一者業力 謂法藏菩薩出世善根大願業力所成 二者正覺阿彌陀法王善住持力所攝 此不可思議如下十七種

一一相皆不可思議

といつてゐる。⁽²⁾さらに曇鸞は長行の文にしたがつて摩尼如意寶の性になぞらえて安樂佛土の不可思議の性を物語り、

兩者の相異する點を三つ指摘しているが、その第二に

彼實但能與衆生衣食等願 不能與衆生無上道願

といつてゐるのによると、不可思議の性は衣食などの第一次的要求を満足せしめるはたらきでなく、生死即涅槃を證知せしめるところの、まさにこの上ないすぐれたはたらきをもつものであることが知られる。

曇鸞はかく佛土の不可思議について二種の力不可思議のあることを指摘しているが、このなか、業力不可思議について「法藏菩薩出世善根大願業力所成」と規定しているが、これは性功德莊嚴偈の釋のなかで

積習成性 指法藏菩薩集諸波羅蜜 積習所成 亦言性者是聖種性 序法藏菩薩於世自在王佛所悟無生法忍 爾

時位名聖種性 於是性中發四十八大願修起此土 卽曰安樂淨土 是彼因所得 果中說因故名爲性

といつてゐる四十八の大願と永劫のあいだの修行―業力とによつて、よく淨土を建立せしめた、その因位の願と業とに注目して、これを大願業力不可思議としたのである。この大願業力の不可思議なるはたらきについて、同じく性功德莊嚴偈の釋のなかで

譬如迦羅求羅蟲其形微小 若得大風身如大山 隨風大小爲己身相 生安樂衆生亦復如是
といふように、譬喩をもつて得生者に與えるはたらきを示している。

また正覺阿彌陀法王善住持力とは、因位における願行を成就した果位の阿彌陀佛のはたらきを示すもので

安樂淨土は無生忍菩薩淨業所起 阿彌陀如來法王所領 阿彌陀如來爲增上緣
といつてゐるように、ときとして増上緣とも名稱され、また善住持の義を

住名不異不減 持名不散不失

石壁寺曇鸞大師の淨土觀成立の意義とその特徴について

と規定している。曇鸞はこの定義に續いて

如以不朽藥塗種子 在水不瀾在火不焦 得因緣則生 何以故 不朽藥力故 若人一生安樂淨土 後時意願生三界教化 捨淨土命隨願得生 雖生三界雜生水火中 無上菩提種子畢竟不朽 何以故 以逕正覺阿彌陀善住持故
 と言ひ、さらにまた卷上における主功德莊嚴偈の釋のなかでも

住持者如黃鸝持子安千齡更起 魚母念持子逕樂不壞 安樂國爲正覺善持其國 豈有非正覺事耶

というように、譬喩を示しながら善住持の義を示している。ともかくこの善住持力は「由虛妄業作不能住持」といつているのによつて知られるように、無作の作でなければならぬ。⁽¹⁰⁾

かく曇鸞によつて指摘された佛土に關する二種の力不可思議をみると、一應は二つに分けてゐるが兩者は無關係のものでなく、因果相互に關係しあつてゐる。特にこのことについては卷下の不虛作住持偈の釋によつて明確にされるであらう。即ち

所言不虛作住持者 依本法藏菩薩四十八願 今日阿彌如來自在神力 願以成力 力以就願 願不徒然 力不虛設 力願相符畢竟不差

というのがそれである。⁽¹²⁾つまり、過去の因位における大願業力は、現在の果位における阿彌陀佛の善住持力の上によくいかされ、まつとうされ、また善住持力は⁽¹³⁾大願業力によらなければ、そのはたらきを得ないわけである。

曇鸞は今一つ、この二種の力不可思議とは違つた不可思議を説いている。即ち「五種不思議中佛法最不可思議」⁽¹⁴⁾というのがそれである。この佛法不可思議は、はたして二種の力不可思議のいづれに相當するであらうか。これは、かの國の菩薩をして常倫諸地の行を超出せしめるはたらきについて、佛法不可思議といつてゐるのであるから、一

應正覺阿彌陀法王善持力に相當するといふべきであらう。

さて曇鸞は淨土のもつ對衆生的はたらきを具體的にいかに表示してゐるであらうか。この問題に關する曇鸞の解答は、長行における五念門釋のなか、第三作願門ならびに第四觀察門の上に見出すことができるであらう。

先ず第三作願門を釋して

奢摩他云止者今有三義 一者一心專念阿彌陀如來願生彼土 此如來名號及彼國土名號能止一切惡 二者彼安樂土過三界道 若人亦生彼國自然止身口意惡 三者阿彌陀如來正覺住持力自然止求聲聞辟支佛心 此三種止從如

來如實功德生

と曇鸞はいつてゐる。このなか第一義は、かの阿彌陀如來の名號及び國土の名號が、よく願生者の一切の惡を止めるはたらきがあるといふのである。阿彌陀佛の名號⁽¹⁰⁾のはたらきはともかくとして、國土の名號のはたらきを、阿彌陀佛の名號のはたらきと併記してとりあげ、同格視してゐるのは、多分

今當解說諸佛名號及國土名號

といふ⁽¹⁷⁾『十住毘婆沙論』の文に準據してのことであらうと思う。この國土の名號のはたらきについて曇鸞は、妙聲功德莊嚴偈の釋において

聲者名也 名謂安樂土名 經言若人但聞安樂淨土之名欲願往生亦得如願 此名悟物之證也

と言ひ、⁽¹⁸⁾「國土名字爲佛事 安可思議」⁽¹⁹⁾とも指摘してゐるのである。このように國土自身ではないが、國土の名號は如來の名號とともに一切の惡を止めるとも、願生の素懷をとげさすともいふのであるから、まさしく文字通り不

可思議なはたらきをもつものである、と言い得るわけである。

つぎに第二義は、彼の淨土は出過三界道の土であるから、そこに生じたものをして身口意の三業の惡を、自然に止めしめるはたらきがあるというのである。かかる國土自身のもつはたらきについて

下品人雖不知法性無生 但以稱佛名力 作往生意願生彼土 彼土是無生界見生之火自然而滅

とも、また

有凡夫人煩惱成就 亦得生彼淨土三界繫業畢竟不牽 則是不斷煩惱得涅槃分 焉可思議

ともいわれるように、衆生の分別執著や煩惱にわずらわされることなく、むしろそれらを清淨智見にたかめるはたらきのあることを指摘している。

第三義は、阿彌陀如來の正覺住持力に聲聞辟支佛を求める心を止めしめるはたらきがあるというのである。かかるはたらきについて曇鸞は、大義門功德莊嚴の偈を釋するなかで

問曰 尋法藏菩薩本願及龍樹菩薩所讚 皆似以彼國聲聞衆多爲奇 此有何義 答曰 聲聞以實際爲證 計不應

更能生佛道根芽 而佛以本願不可思議神力攝令生彼 必當復以神力生其無上道心 譬如鵝鳥入水魚蚌咸死 犀

牛觸之死者皆活 如此不應生而生 所以可奇 然五不思議中佛法最不可思議 佛能使聲聞復生無上道心 眞不

可思議之至也

と⁽²⁾言い、また不虛作住持功德偈の釋において

見有如來但以聲聞爲僧無求佛道者（中略） 又人間佛名號發無上道心 遇惡因緣退入聲聞辟支佛地者 有如是等

空過者退沒者 是故願言 使我成佛時值遇我者皆速疾滿足無上大寶 是故言觀佛本願力遇無空過者能令速滿足

功德大寶海

⁽²³⁾ と言ひ、ともに聲聞辟支佛に無上道心をおこさしめるはたらきを指摘しているのである。

次に曇鸞は第四觀察門を釋して

毗婆舍那云觀者亦有二義 一者在此作想觀彼三種莊嚴功德 此功德如實故修行者亦得如實功德 如實功德者決定得生彼土 二者亦得生彼淨土即見阿彌陀佛 未證淨心菩薩畢竟得證平等法身 與淨心菩薩與上地菩薩畢竟同得寂滅平等

⁽²⁴⁾ といつてゐる。このなか第一義は三種二十九句の淨土の功德莊嚴はすべて如實であるから、修行者に如實の功德を得しめるはたらきがあるといふのである。かかる考えに立脚したのが、「此十七種莊嚴成就 能生眞實淨信 必定得生彼安樂佛土」⁽²⁵⁾ という一文である。しからは淨土の莊嚴功德自身がもつ如實とは、具體的にいかなるものを指しているのであらうか。表現こそ眞實とあつて、如實とはなつていないが、曇鸞が『無量壽經論註』卷上において不實と眞實の二種功德を説くなかの、眞實功德に注目すべきであらう。それによると

從菩薩智慧清淨業起莊嚴佛事 依法性入清淨相 是法不顛倒不虛僞 名爲眞實功德 云何不顛倒 依法性順二諦故 云何不虛僞 攝衆生入畢竟淨故

⁽²⁶⁾ といつてゐるが、まさしく淨土の功德莊嚴の體用を示したものであり、「攝衆生入畢竟淨」といふはたらきこそまさしく、修行者に如實功德を與得せしめるはたらきであるわけである。

第二義は得生者が阿彌陀佛をみたてまつることによつて、常倫諸地の行を超越しうることを指摘したものであつて、第一義が願生者をしてその素懷をまつとうせしめるはたらきであつたのに反し、この第二義は既に淨土に生じ

た見佛者にはたらくはたらきである。

曇鸞がこの第二義において示した得益は、長行における佛莊嚴の第八不虛作住持偈に續く文を轉載したものであり、曇鸞はこれを阿彌陀佛の第二十二必至補處の願に關聯せしめて理解して、ついで

言十地階次者 是釋迦如來於閻浮提一應化道耳 他方淨土何必如此 五種不思議中佛法最不可思議 若言菩薩

必從一地至一地無超越之理

といつてゐる。⁽⁷⁰⁾ここに此岸と彼岸を對比しながら、彼岸なる淨土にもたれる得生者⁽⁷¹⁾見佛者をして常倫諸地の行を超越せしめるはたらきを強調してゐるのである。

曇鸞はこの外、淨土のもつ對衆生的はたらきを、それぞれの功德莊嚴に卽して指摘してゐる。今それらのなか顯著なものを數點指摘しておこうと思う。

最初に曇鸞は淨土の莊嚴が種々の珍寶をもつにいたつたことについて

興大悲心 願我成佛必使珍寶具足嚴麗自然 相忘於有餘自得於佛道

と指摘してゐる。⁽⁷²⁾さらにまた觸功德莊嚴の偈を釋し

觸樂應者而此增道事同愛作 何可思議

と、淨土の草柔輒にはこれに觸れるものをして法喜の樂を生ぜしめたり、また愛作菩薩のごとく菩提心をおこさずはたらきのあることを指摘してゐる。これらの二つの功德莊嚴は、すべて愛著の心を生ぜしめ、しかもそのことが佛道を増進せしめるはたらきであるという點で、執著をもつて執著をこえしめるものであると言わねばならない。

さらに淨土の光明について、

彼土光明從如來智慧報起 觸之者明黑闇終必消除

といふに、ひとたび光明に觸れたものをして、——造罪をかさねることいかに重く、かつ久しくとも「光若暫至即便明朗」といふように、のこりなく消除するはたらきのあることを指摘している。

さらに阿毘跋致の體得をめぐつて難易二道、自他二力を説いた曇鸞は

生彼正道世界即成就出世善根入正定聚 亦如彼風非身而身 焉可思議

といふように、かの淨土自身に得生したものをして正定聚を得しめることを指摘し、微小なるかたちをした迦羅羅蟲が大風を得てその身が巨大になるように、佛土からするはたらきを得て正定聚を獲得することを強調している。これは、

但以信佛因緣願生淨土乘佛願力使得往生彼清淨土 佛力住持即入大乘正定聚 正定即阿毘跋致

といつてゐるように、第十八念佛往生の願によつて阿彌陀佛の淨土に生じたものは、佛力住持即ち第十一住正定聚の願のはたらきを得て、阿毘跋致を獲得するのであるから、まさしく佛力住持がよく正定聚に至らしめるわけである。

最後に曇鸞は五念門の第五廻向門を釋し、廻向に往相還相の二種の相あることを指摘し、彼の淨土に生じて奢摩他・毘婆舍那を得て方便力成就してのち、淨土を捨てて生死界に生じて一切衆生を教化するのを還相廻向と名付けてゐる。また菩薩功德莊嚴の第四を釋して、かの淨土の菩薩は他方の無三寶處に至つて「如有佛 使佛種處處不斷」といつてゐる。

かかる此土還來の菩薩が三界雜生のなかにあつて、よく教化の實をあげ、三界雜生のために障礙されることなく、

無上菩提心を失わないのは、阿彌陀佛の正覺善住持力のたまものであることを指摘して次のようにいつている。⁽⁸⁸⁾

若人一生安樂淨土 後時意願生三界教化衆生 捨淨土命隨願得生雖生三界雜生水火中 無上菩提種子畢竟不朽
何以故 以逕正覺阿彌陀善住持故

このように曇鸞によつて示された、淨土のもつ對衆生的はたらきを具體的にみてきたのであるが、一應佛土の不可思議力と言つてはいるが、對衆生的作用に關して淨土自身のもつはたらきとは判然と區別しがたい點に多く出會つてゐる。このことは淨土を建立せんとする發願の成立過程とともに、淨土は佛身をはなれてあり得ないことを物語るものと言ひ得るであらう。従つて、淨土の三種二十九句の功德莊嚴は、「此三種成就願心莊嚴」といつてゐるように、阿彌陀佛の願心の顯現に外ならないわけである。このような點からするならば、淨土の一の功德莊嚴は、まづたく衆生のためにあるといつても過言ではない。この點で曇鸞の淨土觀は、全分他受用的性格をもつと言わなければならないであらう。

む す び

曇鸞の淨土觀は世親の『無量壽經論』に説く淨土——三種二十九句の功德莊嚴にもとづいてゐることは、たしかな事實である。しかし、はたして世親の思想的立場にたつての理解であるか、否かは問題である。⁽⁴⁰⁾

曇鸞は世親の思想領域のなかで、世親の論書を研鑽することにこと關く時代、しかも法身的色彩の濃厚な傾向の

なかにあつて、報身阿彌陀佛の願心の根本意趣をよくさぐりあてて、それをよくくみとり、すばらしい淨土觀をうちたてることに成功したのである。このことは曇鸞がただ單なる教相學者でなく、いかに深く阿彌陀佛の聖意に活き、いかされた人であるかを物語るものである。曇鸞の淨土觀は道綽・善導における淨土觀成立の基礎作業をはたしたもののとして、その評價は實に高いわけである。

- 1 上卷 — 淨全 1. 222. b 下卷 — 淨全 1. 241. a
- 2 卷下の觀察體相の釋 — 淨全 1. 240. a
なお五種の不可思議は『大智度論』卷第三十に、「經說五事不可思議 所謂衆生多少 業果報 坐禪人力、諸龍力 諸佛力 於五不可思議中 佛力最不可思議」——大正藏 25. 283. c — という一文にもとずいたものであらう。『無量壽經論註』と『大智度論』との關係については、拙稿「往生論註と大智度論」——『印度學佛教學研究』第十三卷第一號掲載参照
- 3 淨全 1. 240. a
- 4 卷下の利行滿足の釋 — 淨全 1. 255. a — のなかで、「無上者言此道鎔理盡性更無過者（中略）道者無礙道也 經言十方無礙人一道出生死 一道者一無礙道也 無礙者謂知生死即是涅槃 如是等入不二法門無礙相也」といつている。
- 5 卷上 — 淨全 1. 223. b
- 6 卷下 — 淨全 1. 241. b
- 7 卷上 妙色功德莊嚴偈の釋 — 淨全 1. 225. a
- 8 卷下 主功德莊嚴偈の釋 — 淨全 1. 243. b
- 9 淨全 1. 243. b — 244. a
- 10 淨全 1. 227. a

- 11 卷下 不虛作住持功德莊嚴の釋 — 淨全 1. 247. b
- 12 淨全 1. 247. b
- 13 卷下の不虛作住持功德莊嚴偈の釋に、「不虛作住持功德成就者 蓋是阿彌陀如來本願力也」— 淨全 1. 247. b と「うに住持力を本願力ともシノニムしてゐる。」
- 14 卷上 大義門功德莊嚴偈の釋— 淨全 1. 229. b。 卷下 不虛作住持功德莊嚴偈の釋— 淨全 1. 248. b
この佛法不可思議は『大智度論』卷第二十六に「五種不可思議法中 佛最不可思議 是十八不共法 是佛甚深藏 誰能思議者」— 大正藏 25. 248. c と「言ふ」また同卷第九十三に「佛法於五不可思議中最第一」— 大正藏 25. 714. a によつたのであらう。
- 15 淨全 1. 239 a—b
- 16 如來の名號については拙著『無量壽經論註の研究』所載の「曇鸞の名號觀とその背景」を參照
- 17 卷第五易行品 十方十佛章— 大正藏 26. 41. c
- 18 卷上— 淨全 1. 227. a
- 19 卷下 妙聲功德莊嚴偈の釋— 淨全 1. 243. b 『維摩詰所說經』卷下菩薩品に「有以音聲語言文字而作佛事」— 大正藏 14. 553. c によつて「名字爲佛事」としたのであらう。
- 20 卷下 入第一義諦の釋 — 淨全 1. 246 a
- 21 卷下 清淨功德偈の釋 — 淨全 1. 241 a
- 22 卷上 — 淨全 1. 229. a—b
- 23 卷上 — 淨全 1. 232. b
- 24 淨全 1. 239. b

- 25 卷下 入第一義諦の釋—淨全 1. 245. b
- 26 淨全 1. 222. a
- 27 淨全 1. 248. b
- 28 卷上 種々事功德莊嚴偈の釋—淨全 1. 224. b
- 29 卷下—淨全 1. 242. a
- 30 卷上 觸功德成就偈の釋—淨全 1. 225. b
- 31 愛作菩薩のことは東晋竺難提譯『大寶積經』大乘方便會に出ず—大正藏 11. 598. c
- 32 卷下 光明功德莊嚴偈の釋—淨全 1. 243. b
- 33 卷上 三義校量の第一在心の義に、「云何在心 彼造罪人自依止虛妄顛倒見生 此十念者依善知識方便安慰聞實相法生 一實一虛 豈得相比 譬如千歲闇室光若暫至即便明朗 豈得言闇在室千歲而不去耶」—淨全 1. 236. b
- 34 卷下 性功德莊嚴偈の釋—淨全 1. 241. b
- 35 卷上—淨全 1. 219. a
- 36 卷下—淨全 1. 239. b—240. a
- 37 卷上 淨全 1. 234. b
- 38 卷下 主功德莊嚴偈の釋—淨全 1. 243. b—244. a
- 39 卷下 淨入願心の釋—淨全 1. 250. a
- 40 曇鸞の淨土に對する奢摩他、毘婆舍那の世親的理解に關く點については、拙稿「淨土教における觀・稱の問題——特にシナ淨土教にみられる觀より稱への移行」——『佛教文化研究』第二二號所載參照。亦世親の思想的領域内で行つた世親の淨土觀については、拙著『無量壽經論註の研究』所收「世親の淨土觀とその思想的背景」參照。

石壁寺曇鸞大師の淨土觀成立の意義とその特徴について

(昭和四十年度文部省科學研究費による綜合研究)

